

## 論題 「栗木京子研究」

大正大学大学院文学研究科国文学専攻 博士後期課程 草木 美智子

### 要旨

現代歌人栗木京子は、昭和五〇年「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」<sup>ひとひ</sup>で知られる「二十歳の譜」で第二回角川短歌賞次席となる。以後現在までに歌集一〇冊、短歌関連書籍を多数発表し、新聞歌壇の選者、メディア出演等、その活躍は多岐にわたる。受賞歴も多く、名実共に現代短歌界を代表する歌人であると言えよう。しかし、管見の限り、デビュー時から現代までの「歌人栗木京子」について体系的に分析した研究は見当たらない。そこで、本論文では、「歌人栗木京子」の初期作品（京都在学時）から第一〇歌集『ランプの精』（平成三〇年七月、現代短歌社）までを取り上げ、表現技法（レトリック・歌集構成）、栗木短歌の特質である「社会詠」「家族詠」の分析と考察を行い、さらに詠歌「視点」の変化とその背景について明らかにすることを目的とした。

本論文の構成について述べる。本論文は、第四章第一三節から成り、それに序章と結章を付した。巻末には、「栗木京子年譜」と「初出一覧」も付記する。

本論文の内容と結論については、以下の通りである。

第一章では、栗木短歌の表現と技法に着目した。第一節では、第五歌集『夏のうしろ』の「体言止め」に焦点を当てた。その結果、本歌集の「戦争」というテーマが、頻出する言葉「夜」「白」と密接な関係にあることが認められた。特に、「白」は栗木の幼少期の体験と接続していることが明らかとなった。さらに、栗木が「体言止め」を用いる理由として、読者と作者ともに、「体言止め」が持つ効果によって、表現の可能性の拡大を得られるからである点を結論とした。第二節では、全一〇歌集の約一割に用いられる「直喩表現」に着目し、【ごとし】【やうなり】を抽出し、活用形ごとの用例数を示した。これらの調査結果から、【ごとし】【やうなり】による「直喩表現」の特徴二点を明らかにした。それは、デビューから現在まで、漢文調「ごとし」を多用していること、第九歌集『南の窓から短歌日記<sup>2016</sup>』を他歌集と比較すると「やうなり」が「ごとし」の数を上回る点で異なることである。これらの理由として、助動詞「ごとし」「やうなり」が有する歴史的用法に依拠すること、栗木は各歌集が持つ印象によって意図的に、「ごとし」「やうなり」のように使用を選択している点を指摘した。なお、本論文でも述べているが、本節は、今後も研究を継続するための序説と位置付けており、今後も継続して進めていく。第三節では、和歌の「本

歌取り」から展開し、現代短歌では「引用」と称される修辞技法に着目した。特に、本節では「俳句」に注目し、「俳句」引用による栗木短歌の表現とその可能性を知るべく、「俳人」四人とその作品を取り上げた。その結果、①日野草城と栗木が有する「京都」「家族」の共通感覚の存在、②永田耕衣と栗木に共通する「観察」の視点、栗木の特質である「社会詠」に耕衣が及ぼした影響、③渡邊白泉の「戦争句」が栗木の歌に強い影響を与えたこと、④赤尾兜子の戦争を悼む句を「引用」することにより、栗木が「希望」へと変化させる歌を詠んだこと、以上の点について具体例を上げながら論じた。これらの分析と考察を踏まえた結果、「栗木が俳句を引用すること、自歌の世界を広げ、意味の重層化を果たすことを意図して引用する手法」を指摘し、さらに、それによって生成される新たな表現世界を短歌に「展開」させている、という点を結論とした。

第二章第一、第二節では、栗木京子の全一〇歌集を二分（第一～第五、第六～第一〇歌集）し、記した。目的は、全一〇歌集の「巻頭・巻軸歌」の配列から、その対応構造と意図を明らかにし、作者の歌集編纂意識に迫ることである。手法としては、歌人で国文学研究者である佐田公子の先行研究を踏まえた上で、私解を加え特徴等を分析、考察した。その結果、『古今集』の時代から歌の配列、構成を重要視してきた歌人の精神が、現代歌人である栗木京子にも継承されている点を指摘した。

第三章では、栗木短歌の特質の一つである「家族詠」に焦点を当てた。第一節の冒頭では、栗木の「家族」とその歌の数について簡潔に記した。その数の多さから「子（息子）」と、結婚後から継続して詠む「夫」の歌、特に「社会」をキーワードにした歌を中心に分析と考察を行った。その結果、栗木が一番身近な存在である「夫」「子（息子）」を介して、「社会」を詠んでいることを明らかにした。そして、その作歌姿勢が第五歌集『夏のうしろ』で増えた「社会詠」へと接続していく過程も指摘した。

第二、第三節では、栗木短歌の「戦争詠」と「家族」に焦点を当て、両者が短歌表現を通してどのような特質を生み出していくか、について分析を加えた。第二節は「家族」、第三節では「作者自身」に二分し、論を進めた。まず、第二節では、「戦争の実体験がある家族（祖父母、父母、叔父、伯父）」と、「実体験がない家族（夫、子）」に分け、各歌を挙げ解釈を行った上で分析を進めた。その結果、栗木短歌における「戦争詠」の原点と始発は、戦死した伯父、子を亡くした祖母、兄を亡くした栗木の母という「家族」の「静かで深い悲嘆」への共感であることが明確に証明できたと言えよう。第二節のまとめとして、①栗木の「戦争詠」は、「家族」を介して詠まれ、身近な家庭生活の中から「戦争」の現実を凝視している、②栗木は「戦争」を詠ずるにあたって、「戦争」と真摯に対峙して、現実においてそれを体験しようとしている、③栗木の「戦争詠」の特徴として季節では「夏」、色彩では「白」の表現が多い、以上の三点を挙げ、結論とした。

以上の第二節を踏まえ、第三節では、「作者自身」に着目し、全歌集から該当歌を抜き出し、考察を行った。その結果、栗木の「戦争詠」の原点は、「家族」にあり、その一員として作者も身近な家庭生活の中で葛藤を重ねながら「戦争」の現実を凝視している姿が認め

られた。さらに、栗木は「戦争」を詠ずるにあたって、「戦争」と真摯に対峙して、自己矛盾を抱えながら現実において追体験しようとしている、と結論づけた。

第四節では、第八歌集『水仙の章』から「震災詠」と「母の詠」に着目し、詠歌を通して分析を行った。その結果、栗木が本歌集で詠んだ「母の詠」三八首を通し、「母」の老いに直面し感じた戸惑いを、これまでには見られない素直さで詠出している点が確認できた。震災後、取り上げられた「当事者」「非当事者」という観点に関し、栗木も歌人として思索と作歌を重ねた姿が作品から表出している。その中で、栗木は認知症により「記憶」を失った「母」、その「母」を失いつつある「娘」の視点で、「震災」を主題としたノンフィクション風の「社会詠」を詠んだと言える。それは、事実を提示した歌を詠むことで「真実」を語る手法である。さらに、本歌集主題「東日本大震災」「母（の介護）」に底流するものを、該当歌の分析を通し考察した。その結果、「喪失」と「祈り」であることを指摘した。以上を踏まえ、本歌集で栗木が一番表現しなかったことは、それらを詠ずること、震災の犠牲者に対する「鎮魂」であると結論づけた。

第五節では、「子」を詠む女性歌人として、栗木が自著に名を挙げる五島美代子と、栗木作品における「母」の視点について分析と考察を行った。その結果、美代子の「母の詠」には「母子」の存在が明確に表現されているが、栗木には「母」である自身の存在が明確ではないことが浮上した。さらに異なる点として、美代子が明確に表現する「子」への感情が、栗木作品においては客観的に「子」のいる光景、存在を記録する手法となることも認められた。これは栗木短歌の特質の一つである「社会詠」を詠む手法と重なるという点を指摘した。両歌人の共通点としては、「社会」に注目し、それぞれの「時代」を鋭く詠む点も確認できた。

第四章では、栗木短歌の特質の一つである「社会詠」の生成とその展開を実証的に辿った。第一節では、京都大学在学時の歌を初期作品と位置づけた上で、初出調査を通し分析と考察を行った。その結果、特に歌集に収められていない作品にも着目したところ、当時の栗木が抱えていた挫折感、劣等感、孤独感を作品に詠んでいたことが明らかになった。また、それらの感情が「表層ではなく深層に真実がある」という視点を形成していき、その後の「社会詠」へと継承されていく過程を明らかにした。

第二節では、「数字」を栗木短歌の重要なキーワードと位置付けた上で、作品を抜き出し分析と考察を行った。その結果、「数字」は特に「社会詠」と密接な関わりを持ち、その原点は京都大学理学部で培われたものだと指摘した。また、「数字」を用いた「社会詠」を詠むことで、「事実を提示」し、「時代を証言」する「クロニクル（記録）」の意味を持つことと結論づけた。

第三節では、栗木の初期作品（京都大学在学時）から現在までの主要な歌の解釈を踏まえ、各歌集にどのような作者の「視点」が認められ、それが歌歴を重ねることでのうに变化していくのかについて明らかにすることを目的とした。その結果、初期作品と第歌集『夏のうしろ』から「傍観者」の視点が、第八歌集『水仙の章』では、「外側の出来事を

自己という「内」に引き付けて詠む視点」の進展として、「当事者」へと変化したことを確認した。そして、第一〇歌集『ランプの精』では、自ら事象の「内」へと入り行動し、レトリックに可能な限り依存せずストレートに詠む姿勢から「行動者」の視点へと変化したことを作品に沿って実証できた。

以上、本論文では、「歌人栗木京子」の作品を各章段に分け、作品の解釈を踏まえた上で分析と考察を行い、実証的に結論へと導くことができた。その結果、栗木短歌の特質とされる①栗木短歌の表現技法（レトリック・数字表現）、②「社会詠」の生成と展開、③「社会詠」の詠歌視点の変容、④「戦争詠」と「家族」との関係性、等について具体的に明示し得たと考える。